

往復書簡 (前編)

埼玉県で「久野農園」を経営する久野裕一さん。「安心はおいしさ」の想いと、「野菜で癒える人がいる。昨日より少しでも、精進するのだ」の農園スピリッツで、完全無農薬野菜を生産・販売しています。

拝啓 高木 勇樹様

九州で発生した地震によって亡くなられた方々のご冥福を、心からお祈り申し上げます。未だ地震が続く、不安な日々を過ごしている方がたくさんいる中で、当たり前の日々のありがたみを改めて感じます。今回ご縁があり、高木様と手紙のやりとりができるこの機会を大切にしたいと思います。

私は新規就農で有機農業を始めて、今年で19年目になります。大学卒業後、埼玉の有機農家で1年間研修し、23歳から33歳まで沖縄の渡嘉敷島で自然卵養鶏(300羽)と1haの畑で様々な野菜を育てていました。10年間、専業農家が一人もいない人口700人、ちよつとの離島でがむしやらに働きました。結局最後まで野菜を育て、利益を出しながらお客様から野菜を買い続けてもらう仕組みが作れず、とても「農業」と呼ぶには程遠い経営でしたが、この時の経験が今の私の全ての基盤になっています。

沖縄での最初の5年は、台風や季節風に翻弄されながら、生産の試行錯誤で精一杯の日々。後半の5年は、野菜や加工品のネット販売、観光客向けの直売など販売の試行錯誤で精一杯。商工会やネット通販の勉強会に参加し、農家視点と顧客視点の違いを学んだり、経営とはなんぞやということを考えたり。その結果、オンラインショップング大賞の奨励賞を頂くなど努力したことに対してそれなりの評価もいただきました。しかし、販売に力を入れ、経営を勉強しても、それだけでは「農業」にならない。やはり、お客様が求める本当にいいものを提供し続ける、「ものづくり」の力が伴わないと成り立たないということを感じました。

10年間過ごした島を出るのは厳しい選択でしたが、「ものづくり」の力をつけるため、初めて農業の世界に飛び込んだ研修先の勧めもあり、2007年に埼玉で新たなスタートを切りました。

埼玉に移転して9年になりますが、現在は、7ha程の規模で、社

員1名、パートさん4名と家族で、人参や小松菜、ほうれん草など

10品目弱を有機で栽培し、ゆるい契約栽培のような形を中心に販売しております。品目をしぼり、生産工程をゼロベースで見直し、苦ししながらも必要な設備投資をすることで、ここ1、2年はようやく品質と経営上必要な数量を確保できるようになりました。

「創って、作って、売る」プロセスを早く回すことが大事と言われますが、「作って」の部分、ようやく新米農家レベルに近づいたくらいに感覚でしょうか。30代は、「こんなに長い時間をかけて、周囲に迷惑をかけて、まだこの程度か」と、途方にくれる日々でしたが、ここ1、2年はほんの少し光が見え始めてきた実感があります。

ただ、それと同時に責任とプレッシャーも感じています。経営として成り立たせる難しさ、それを続ける難しさ。自分の意志決定が周囲に与える影響の大きさに怖さも感じます。

この先、農業の世界に入ってくる若い人に自分はどんな将来像を提示できるのか、一緒に作っていきけるのか。自分の中で答えらしきものはあるつもりですが、やはり不安と共にある毎日です。これから農業の世界で働く人たちにとって、「大変かもしれないけれど豊かな」将来像について高木様はどのような考えをお持ちでしょうか。お聞かせいただければ幸いです。

敬具

平成28年5月吉日

久野 裕一 (くの ゆういち)

1974年 東京都生まれ(両親は山形出身で、母方は稲作専業農家)

1997年 沖縄県島尻郡渡嘉敷村で新規就農

2007年 農園を埼玉県に移転

人参や葉野菜等の完全無農薬野菜の生産及び販売を行う。野菜本来の栄養価を持ち、新鮮で使いやすく、食味に優れている野菜作りを目指している



拝復 久野 裕一様

熊本地震は50年ほど前、熊本城を眼前にのぞむ熊本水省の出先機関である九州農政局に丸2年勤務したことのある私にとつて大変な衝撃で言葉が失いました。

改めて亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに被災された方々に心からお見舞い申し上げる次第です。

私が当時直接お世話になった方々のほとんどは既に鬼籍に入られておりますが、そのご縁戚のご苦難はいかばかりかと辛い思いで一杯です。

さて、貴兄は自らの来し方をさりと書かれておられますが、私がこれまでに接した新規就農者の中で一、二を争うような困難な道を選択し、乗りこえられてこられた方とと思いました。

私はこれまでの経験の総括として農業を次のように定義しています。

農業は人、農地、技術、企画・販売力、管理能力などの経営資源を創意・工夫・努力(自己責任)で活用し所得を得る、経営として持続する総合知識集約産業であると。当然、家族経営、企業経営、農協のような組織、集落営農による経営など経営形態は問いません。

貴兄の農業はものづくり(農地、人、技術)のところ、病気の

「種」を内包しないための野菜づくり、加えて生産性を高めると高いハードル(ものさし)を自ら設け、そのものさしを持続可能性(分相応)というもので計り、昨日より少しでも精進する努力で突破しようとしておられます。素晴らしい創意・工夫・努力です。

この19年間での経験を貴兄は「販売に力を入れ、経営を勉強してもそれだけでは「農業」にならない。…お客様が求める本当にいいものを提供し続ける「ものづくり」の力を伴わないと、ということを感じ」と総括しておられます。

私も行政という仕事のいろいろな場面で何度もステークホルダー、利害関係者の難しい調整に直面致しました。その時どう対処したか、行政

の原点、誰のため、何のため、に立ち戻って判断し、その結果に責任をとるということで決断・実行するということだったように思います。その積み重ねが自分のものさしを豊かにし、大体の困難に自信をもつて立ち向かえるようになったと思います。

貴兄の総括も本質は同じ。リーダーの貴兄のすべきは、原点に立ち戻って判断し、決断・実行し、その結果、責任をとるということに尽きると思います。その判断は貴兄ご自身の感性(直感力、創造力、想像力、先見性など)これまで貴兄が蓄積した総合力)によって行うしありません。

また、この先農業の世界に入ってくる人に「大変かもしれないが豊かな将来像」ということですが、「大変でなく豊かな将来像」を示せる働く場はあるのでしょうか。私は否だと思えます。先ほど申し上げた通り、農業の原点は総合知識集約産業です。これが将来像で、その中身のように作るかは貴兄が歩まれたように、農業の世界に入ると覚悟したその人自身ということではないでしょうか。私はそう思います。貴兄のご意見を次回頂けたらと思います。

平成28年5月吉日

敬具

高木 勇樹(たかぎ ゆうき)

- 一九四三年 群馬県生まれ
 - 一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任
 - 一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
 - 二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事長
 - 二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
 - 二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
- 現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

